



## 研究活動の支えとしての工学分館

災害科学国際研究所・教授

五十子 幸樹

私が東北大学にお世話になるようになったのは2008年6月からで、今年でちょうど10年になります。私の赴任の直前に、社会人の立場で博士後期課程に在籍されていた方が、質量要素として回転慣性質量を用いた見掛け質量装置を用いることで高効率な動吸振器を実現する方法を提案され、学位を取得されていました。その研究を更に発展させ、建築物の地震時応答制御に実用化するための研究プロジェクトが立ち上げられ、私も関わることとなりました。

社会人時代、建築構造設計に関わっており、免震・制振建物の設計や日本建築学会の振動制御関連委員会活動において動吸振器については基本的な知識を持っていましたが、本格的に研究するのは初めてでした。既往文献のサーベイから始めることとなり、工学分館には大変お世話になりました。

動吸振器は1920年代に提案されたもので、その当時の論文は電子化されていないものが多くあり、既往研究に関する論文を集めるためによく工学分館に通ったことを覚えています。現在は便利な時代で、インターネットで検索すると容易に論文が手に入るようになっていますが、それでも古くて電子化されていないものは入手が困難です。流石に伝統ある国立大学だけあって、古い論文でも図書館に行けば比較的容易に手に入ることに感謝したものです。

論文を書いている行き詰まったり、引用すべき論文があることに気づいた時に、夜間に工学分館に行ったこともしばしばあります。首尾よく論文のコピーを手に入れて早速読んでみると、期待していたことが書かれていないこともあれば、自分が思いついたことが既にそこに書かれてあり、既に解決された問題であったことを発見してがっかりしたこともあります。

研究を進めるにあたり、目的の論文を手に入れるまでいてもたってもいられない時に、工学分館には夜間でも入館できることを大変ありがたく思ったものです。また、電子化されていない文献が整理されて保管されており、見つけ出すのもそれほど大変ではありませんし、ほぼ確実に、思い立ったら直ぐに目的の論文が見つかることは大きな安心感に繋がっています。

工学分館40周年を機に改めて感謝申し上げ、今後とも私達の研究活動を支えて下さることに期待します。

